

## 職員研修報告

研修名	法人研修 ~乳幼児の発達について・発達障害について~
主催者	社会福祉法人尚徳福祉会
日時	2020年2月1日(土) 15:00~17:00
会場	AP市ヶ谷 Cルーム
講師名	榊原 洋一先生 (お茶の水女子大学名誉教授 日本子ども学会理事長)
参加人数	200名
<u>研修内容</u>	
<u>乳幼児の発達の心理的発達について</u>	
①社会性②言葉 ③臨界期と発達障害④良い保育の質とは⑤保育環境と子どもの発達⑥自己肯定感	
・精神発達は、認知・言語・社会性・情緒(情動)に分類される	
・知能の分類(ガードナー) 多重知能 MI: 知能は一つではなく、複数ある	
: ①論理・数学的知能 ②言語的知能 ③運動感覚的知能 ④音楽的知能 ⑤空間的知能	
⑥対人的知能 ⑦博物学的知能 ⑧内省的知能	
・新生児模倣(メルツフォフ)	
・顔の嗜好(ジョンソン) 人の顔の絵を追う時間が長い	
→周囲の大人が楽しい顔をしていると、子どももハッピーな気分になる	
・自閉症スペクトラム障害群において模倣に障害が見られることなどから、ミラー・ニューロンの機能不全が自閉症スペクトラム障害の神経基盤となると提案(2001)	
・随件事象の理解(ロビー・コリア) 4か月の乳児の足にモビールをつないで探索的な行動が可能であると証明	
→乳児の脳には身边周囲に起こる様々な現象同士の因果関係や随伴関係を探る生得的な機能がすでに備わっている	
・共同注意: 2項関係から3項関係へ	
・心の理論(サリー・アンの課題) 4歳後半から5歳にかけてわかるようになる	
→3歳に「痛いからやめて」「悲しいからやめて」は理解できない。「やってはいけない」と伝えるのが有効	
・言語の発達(チョムスキー) 普遍文法論	
・デンバースケール: 乳幼児の発達を『個人-社会』『微細運動-適応』『言語』『粗大運動』	

#### の4領域で評価する発達スクリーニング検査

- ・左脳のウエルニッケ野、ブローカー野（マッカーサー）言語理解と関連性
- ・言語的発達の早さは女児>男児 理由はわかっていない

・子どもの豊かな言語環境（ハートとリズリー）11~36か月の家庭にマイクロフォンを設置。乳児が1時間に500~700語を聞いているのを明らかにした。意識的ではなく自動的に母国語を獲得する。子どもは自分で文法を理解する（読み聞かせをしたかどうかで差はなかった）  
母親が産後うつ病などの場合、言葉が少なくなる

→保育は言語を使うことが大切

- ・マザリーズ（大人が乳幼児に向かって話しかける際に自然に発してしまう、声高で抑揚のついた独特の話し方）は国によって差があり、日常の会話と比較し日本は少ない、アメリカは大きい
- ・臨界期と愛着（ローレンツ、ヘス）…インプリンティングやデゴイを追うひな鳥の実験

13時間といわれる。人間にはない。人間の愛着は何か月もかかって育っていく

- ・言語の臨界期（レネバーク）：言語取得の臨界期が12~13歳だと主張
- ・3歳児神話

①3歳までは子育ては母親がしないと発達に障害がおこる }  
②3歳までは豊かな環境で育てないと発達に障害がおこる } 現在は違うことがわかっている

- ・母子愛着理論（ボウルビィ）：正常な発達のためには少なくとも一人の養育者と親密な関係を維持することが必要

（ラター）：発達遅滞は劣悪な施設的环境や、多数の不特定の保育者が関連

（ハーロー）：アカゲザルのハードマザー・ソフトマザーの実験

→正常発達に必須なことは、母親が育てることではなく、愛着対象となる保育者が固定されていること（少なくとも数人以下）である

- ・母子相互作用（クラウス）：未熟児が虐待のハイリスク要因になることから提唱
- ・マシュマロテスト（ミシェル）：追調査で食べなかったグループがより優秀と評価されている
- ・良い保育の質とは？（施設・保育者・保育方法・教材など）

米国 NICHD（国立小児保健・人間発達研究所）：子どもの発達への保育ケアの影響について、1000人以上の子どもの54か月にわたる追跡研究を実施

→保育を受けていた子どもたちは、集団としてみると、母親からのケアだけをうけていた子どもたちのパフォーマンスレベルと変わるところはない。また保育の質が高ければ高いほど、認知発達や社会性の発達でより良い結果を残し、15歳時点での問題行動が少ない。（フリードマン）  
大切なのは、保育者の感受性、肯定的子育てだという科学的な結論が明らかにされた

- ・自己肯定感・自己効力感を育てるためには？

→他人から承認支援、自分にとって重要な領域における能力

- ・幼児は外見、社会的行動、能力、品行などの項目で ジェンダー差ある（外見：女>男等）  
高い認知能力をつける  
セルフコントロール（自制心）を高める

共感力を高める

- ・自己肯定感の発達

幼児期は他者に依存するが、次第に自分自身の認識となる

低すぎる自己肯定感だけでなく、高すぎる自己肯定感も社会的不適応につながりやすい

思春期以降も自己肯定感が他者評価に依存すると人格障害につながる

- ・日本とオランダの子どもの自尊感情の比較（古庄純一）：日本は10歳頃から急速に低下
- ・セルフ・エスティーム（自己肯定感）
- ・子どもの自己認知尺度 SPPC（スーザン・ハーター）：グラグ化
- ・大人の自己肯定感（ローゼンバーグ）：自尊感情質問紙

### 発達障害について

- ・発達障害は複数障害を含んだ総称である
- ・配慮の意味で障害を使うのは誤用。障害と同じ意味。中国で使っている
- ・主に ADHD・ASD・LD

生得的な障害

併存が多い

知的障害が併存することはあるが必須ではない

罹患率が高い（16人に一人）

男児に多い（ASD：4～5：1、ADHD：2：1…1/3～1/4は軽快、LD：あまり差がない）

小児期に顕在化。成人期まで存続

家庭、地域、学級といった集団場面での困難が顕著

- ・ADHDの診断基準 ICD10 DSM-V

日本で大人1.6%、子ども4%にADHD症状がある

思春期には軽快するが、不注意は持続

反抗挑戦性障害

脳の実行機能の障害

遺伝性がある（パークレー）兄弟・親子での罹患

合併障害として行動障害（非行） 二次障害が起こりやすい（説論・叱責多く自己肯定感↓）

アメリカ6万人（8.2%）

ADHD群 非ADHD群

学習障害	46	5
行為障害	27	2
不安障害	18	2
うつ	14	1

- ・発達障害の子はいじめられやすい：いじめるためには他人の気持ちがわからなくてはできない  
→自閉症はできない

- ・ADHD治療薬：コンサータ、ストラテラ、インチュニブ→QOLを高めるため

榑原氏外来事例：コンサータ3か月服用で、テストの点数が読解0点→90点、漢字8点→54点

- ・女性のADHDがなぜ今まで見過ごされていたか？…女性用の診断基準が必要

女性は多動性・衝動性が低く今までの診断基準では気づかれにくかった

出産・育児などの女性特有のライフスタイルでつまづく

二次障害の特徴としてうつや自殺がある

榑原氏外来事例：40代女性、主婦。夫の治療で来院。症状が似ていることで診断。

抗うつ剤では治らず、コンサータで軽快

30代女性、保育士。息子のADHDで受診、自身もチェックリストで診断

コンサータで軽快

→大人は薬で良くなる

- ・ASD DSM-IV：对人的情緒的相互性の欠如
- ・チェックリスト：Mチャート：乳幼児期自閉症チェックリスト（2歳前後、質問紙、親記入式）  
2人に1人は違うといわれる。小さい頃はMチャートで（－）だったが後に自閉症と診断されるケースあり→親への質問紙形式のため  
パス：親面接式自閉スペクトラム症評定尺度（3歳以上適用）

- ・こだわりと神経過敏

（コーエン）著書『共感する女脳、システム化する男脳』で自閉症は極端な男性型の脳とした

- ・社会的(語用論的)コミュニケーション障害：言葉の意味は理解しても、話し相手や状況に応じた  
DSM-V コミュニケーションが困難。こだわりはない

- ・ギフティッド：知的には非常に高いが社会性は成熟していない。チェックリストだけでは誤診  
不適切な環境や治療に長期間さらされ続ける→幼稚園や保育園ではどうか？

- ・自己肯定感を育てるためには？

→成績で評価される。幼稚園・保育園で上げて、学齢に備える？

（日本と近隣のアジア3カ国の自己肯定感を比較する研究：5歳児に比べて7歳児の方が低い自己肯定感を持つ）

空のものをほめてもダメ。ほめる場面をどれだけ作れるか、セッティングできるかが要

### 学んだこと

大学で1年かけて学ぶ内容をテンポ良く、要点を押さえて、聞き手が興味をもって学べるようにご講義くださったことに感謝したい。また数々の有名な歴史的実験や研究をその実験の問題点も含めてご紹介下さり、子どもの発達について科学的にとらえていく視点の大切さを再認識した。

教えていただいたチャイルド・リサーチ・ネットのサイトも非常に興味深い研究が多く掲載されていた。『子どものために働いているすべての人々に、有用な情報をお届けするという使命を果たしていきたい』という榑原先生のお志に深い感銘を受けた。発達障害についても最近のデータを知ることができた。今後も大いに活用させていただきたいと思っている。

このような研修の機会を与えてくださった法人には心から感謝を申し上げたい。

講義の中でもあった日本の大人の自己肯定感は53カ国中最低であり、榊原先生がサイトでも『自分自身の自己肯定感の低さを棚にあげて、やれ子どもの自己肯定感が低いとか、やれ自己肯定感を上げなくてはならない、とっている大人のなんと多いことか!』と嘆かれていた。謙遜が美德とされる国民性では、既存の研究方法では自己肯定感が低く出てしまうとも考えられるということだったが、『低すぎる自己肯定感を向上させる努力は必要ですが、あまり自己肯定感という心理的尺度に縛られる必要はないのでは』というご意見に考えさせられた。

自己肯定感とは、保育において外せないテーマであるだけに、用語としてだけ理解すればよいものではない。私自身もまだ明確に『これだ!』という自信を持った答えはないが、子どもは自分が大切にされているということをちゃんと感じ取る力があると考えている。日々の仕事の中で、子ども一人ひとりを丁寧に見ていき、子ども自身が大切にされているという実感が持てるようにきめ細かなケアをしていくことがポイントであると、現段階では思っている。

近年、自己肯定感や、グリットという概念や、非認知的能力などが注目されている。乳幼児期の関わりとの深い関連性も指摘されている。私たち保育者の資質が問われている。子どもが本来の力を必要になる時に十分に発揮できるように、目の前の子ども達にどう接すれば良いのか責任は重大である。

ただ、私自身が保育園で育ち、とても楽しい思い出がたくさんあること、その思い出は私の心の糧となって確実に今の自分を支えていること、今、保育園で働くようになり大変なことも多いけれど楽しくやりがいもあって頑張りたいと思っていることは、事実である。被験者は自分自身だけの大変主観的な実験結果ではあるが、子どもたちが『保育園はとても楽しい!』と実感できるように保育者の資質の向上についてさらなる努力をしていきたいと感じた研修であった。